学べるゲラ

第86回 浪江町の記録誌

※2025年3月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

「先祖たちが千年も昔から生活してきたところ。申し訳なさを感じた」。福島県浪江町赤宇木（あこうぎ）地区の今野義人さんは昨年、仲間とともに10年以上かけて地区の歴史を800ページ以上の記録誌にまとめた。地区や各世帯の歴史をたどり、水稲やマツタケといった収穫物の一覧表を作り、盆踊りの歌詞に郷土料理のレシピまで載せた。将来の子孫がここで暮らすために必要な情報を詰め込んだという。「記録誌を見て今一度、くわを振り上げてもらいたい」と願いを込めた。

今も県内約3100㌶の特定復興再生拠点区域で避難指示が続く。その半分以上を占める同町山間部は、東京電力福島第1原発から北西にあたり、事故後の風向きなどが影響し汚染が広がった。同町沿岸部や市街地は、新たに住宅や商業施設が建ち始めている。一方、山間部は一部の道路とその周辺部などを除き、今だ除染が手つかずの場所が多い。

2011年秋、国の担当者の「手を掛けなければ100年は帰れないだろう」と説明を受けた今野さんらは言葉を失った。

「（事故前は）不便な面もあったが幸せな生活だった」。紅葉の名所で知られる高瀬川渓谷のる畑川地区出身の斉藤基（もとい）さんは、14年に及んだ避難生活の間、父や妻、古くからの仲間を次々亡くした。

「地域を何らかの形で再生したい」と毎週、避難先の同県大玉村から片道約2時間かけて自宅や農地が

荒れないよう手入れを続けている。いとこの桑原信一さんも「このまま荒らしておきたくない」と自宅の草刈りを欠かさない。

先祖代々の土地は守りたいと心血を傾ける住民たちの中には、高齢世代が多い。記録誌をまとめたうちの一人である今野邦彦さんは、復興が目に見えて進まない古里の姿に危機感を募らせる。「何もなくなって、忘れられてしまうのが一番怖い」